雙和（台湾）・当院医師が意見を交換
第3回郡山・台湾国際医学シンポ

総合南東北病院と台湾・台北医学大学付属雙和病院との第3回郡山・台北国際医学シンポジウムは、5月26日㈮午後1時から郡山市の総合南東北病院北棟第5会議室で開かれ、両病院の医師ら8人が診断・治療の研究成果を発表し合い、意見を交換しました。

両病院は、一昨年4月に医療連携協定（MOU）を結んで医療情報・技術交流を開始。昨年は郡山側が台北に出向き、今年は台北側の一行8人が郡山市を訪れました。

シンポジウムでは、寺西寧南東北病院長が歓迎の言葉、台北のフィー・プン・リー雙和病院長がお礼のあいさつをした後、台北側はイエン・ティン・チェン放射線科主治医はじめ脳神経外科、心臓血管外科、皮膚科の科長ら4人が「軽度の外傷性脳損傷のfMRI」「低侵襲脊椎手術」などそれぞれの研究成果を発表しました。郡山側からは放射線科の青島雅人（放射線科）、平野仁崇（脳神経外科）、菅野恵（心臓血管外科）、金子史男（皮膚科）の4医師が「皮下動静脈奇形IVR」「慢性血栓塞栓性肺高血圧症に対する肺動脈血栓内膜摘徐術の経験」などそれぞれが経験した治療の手法や技術の実績などを披露しました。会場には同病院の医師ら30人が訪れ、双方の医師らの貴重な発表に聞き入っていました。

研究成果を発表し活発な意見を交換したシンポジウム

シンポジウムの後、記念撮影に収まる参加医師たち

BNCT研究センターを視察する台北の一行

雙和病院の一行は、同25日に来日し羽田空港から郡山市入り、シンポジウムに先立って夕方から南東北がん陽子線治療センター、昨年1月から脳腫瘍や頭頸部がん治療などの治験を行っている南東北BNCT研究センターを視察しました。26日は午前中、南東北総合福祉センター八山田を訪れ、高齢者福祉施設の介護サービスやリハビリ訓練の状況を見学しました。

また台北側一行を歓迎する夕食会が同日夕、ボンジュールで開かれ、郡山側から寺西院長や深谷保男院長代行はじめ医師ら20人が出席、リー院長ら台北一行とグラスを傾け懇親を深めました。

夕食会で台北一行の歓迎挨拶する寺西院長（右）

最近よく聞く言葉

季節の変わり目に風邪などで体調を崩し免疫力が低下しやすくなります。そんな時に注意したい病気の一つが、この「帯状疱疹（たいじょうほうしん）」です。子どもの頃かかった水痘ウィルス、つまり水疱瘡を発症したことがある人の皮膚に、神経に沿って帯状に発疹が現れる病気で加齢やストレスなどにより免疫力が低下し、神経節に潜んでいたウィルスの活動が再び活発になることで起きます。

症状に個人差があるが多くの場合、体の一部にチクチク、ピリピリとした痛みを感じることから始まって赤い湿疹ができ、水泡ができて破れ、皮膚がただれてカサブタができます。この間も痛みが続き、夜眠れないほどの痛みに悩まされる人もいるほど様々です。

帯状疱疹

発症者は人口10万人当たり300～500人といわれ40歳以上が75％を占めます。最近は中高齢者だけでなく若い人も安心できない病気。初期段階で虫刺されやかぶれ、単なる皮膚疾患と思い市販の軟膏を塗って対処が遅れ重症化したケースも多く見られます。

原因は唯一つ水疱瘡ウィルス。水疱瘡は乳幼児や10歳児以下の約9割がかかる感染症です。体内に入ったウィルスは消滅せず顔面の三叉神経や脊髄神経、坐骨神経など神経節に数十年間潜伏します。中高年が気をつけたいのは、皮膚症状が治まっても痛みだけが残る帯状疱疹後神経痛。内服薬による治療が必要になることもあるので要注意です。帯状疱疹は自分ではなかなか判断しにくい病気です。痛みの場所は胸や腹、背中が6～7割ですが、理由不明の痛みが体の片側に感じ、赤い湿疹などを見つけたらすぐ皮膚科を受診することです。早期発見と予防が大切です。